

# 統一思想は平和学に何を貢献できるか？

トーマス・J・ウォード  
米国ブリッジポート大学副学長

## 要約:

平和学は欧米において第二次世界大戦終結後まもなく、学問の一分野として西洋世界に現れた。平和学は規範以上のものであり、社会科学の一つへと進化し、博士課程レベル及びそれ以降のレベルで研究できるものになっている。2011年、数人の統一教会員の学者と共に、トーマス・ウォードとクロード・ペロテは統一思想研究院のために統一思想に関連した一連の教材に資するよう招かれた。それを出版して2012年のお祝いとして文師ご夫妻に贈呈することになっていた。

以下の論文は、平和学における統一思想の役割について探求し、「統一の展望と紛争の転換」という題目で準備されたテキストの数章からの抜粋を含むものである。文師ご夫妻の生涯と公的活動の研究を通して、又、統一思想と統一主義の平和哲学を応用することによって、学問としての平和学にとって大いに益することができる。

\*\*\*

## 本文:

戦争は歴史の記憶と同じくらい、そして文明の神話のテーマの時代にさかのぼるくらい遠い昔から人間が経験してきた問題である。統一原理は西洋文明の二つの基本的な源泉であるヘブライズムまたはユダヤ教—キリスト教の伝統とヘレニズムを反映している。創世記を数ページ読むだけで、兄が嫉妬から弟の生命を奪ったことがわかる。カインはその犯罪によって神に印をつけられ、残りの生涯をさまようことになる。聖書の出エジプト記はユダヤ教とキリスト教（特に解放神学）のある解釈の主要なテーマを代表している。出エジプト記はユダヤ人がアマレク族、エドム族、カナン族その他の軍隊と戦って、約束の地を征服し、維持した戦いについて詳述している。

戦争はさまざまに定義されてきたが、平和学の目的のためには、プロシアの偉大な戦争戦略家、カール・フォン・クラウゼビッツによって紹介された戦争観、「戦争は他の手段による政策の継続に過ぎない。」に立ち戻るのが役に立つことがわかるであろう。すなわち、クラウゼビッツは、政治や外交によって政策上望ましい結果をもたらすことができないときは、戦争に戻るものである、と主張する。クラウゼビッツはナポレオンの戦争戦略に大いに影響された。ナポレオンは敵の抵抗する意志を砕くためには、初期の猛攻撃で敵に最大の損害を与えることが必要であることを強調した。敵の降伏か敗北は交渉への道を切り開き、有利な条件で達成できるというのである。

宗教はほとんどの文化の根本的な骨組みであり、このことは六、七世紀の西ヨーロッパで中心的な信仰として現れたキリスト教にとって特に真実であった。イエスは自分を讒訴する人々に抵抗せず、不当な死を遂げたとしても、キリスト教文化は何世紀にもわたって、戦争を人生の一つの面として認めてきた。ア

ウグスチヌスはキリスト教の最も重要な護教論者の一人であるが、彼は「神の国」の中で、人間の墮落の故に、人類は神の国と人間の国の二つの都市に住むようになった、と論じた。人間の国は悪によってかくも汚れているので、戦争はイエスが終末に再臨するまで存在するであろう。しかし、アウグスチヌスによると、悪が広がった世界においても、善悪の区別はある。ただその区別は主の再臨前の期間は必然的に相対的なものである、というのである。アウグスチヌスはその相対的な善悪観に基づくキリスト教の正義の戦争論に貢献した。その理論は何世紀もの後にアキナスによってさらに詳しく説明された。

正義の戦争論は、ごく最近まで進化し続けている。戦争をすることを決定するための鍵となる教義(Jus ad Bellum) とは、

1. 大義名分
2. 正当な意志
3. 正しい権威と公的宣言
4. 最後の手段
5. 成功の確率
6. つりあい

戦争するための合理的根拠 (Jus ad Bellum) は戦争を実施するためのガイドラインによって補われた。戦争するための合理的根拠 (Jus ad Bellum) は戦争のための弁護論とガイドラインの両方を提供したものの、すべてのキリスト教徒が共有したわけではなかった。

平和主義(戦争反対論)は正義の戦争論に反対する見解として長い歴史がある。絶対平和主義者は戦争を想像可能な最も悪なることであり、いかなる代価、人の生命、家族の生命、国家そのものを犠牲にしても避けなければならないものとみなしてきた。キリスト教の伝統の中で、この見解は、「悪には抵抗しない」ようにとしたイエスの山上の垂訓にそのルーツを持つ。

「『目には目を、歯には歯を』と言われていることは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。」

(マタイ:5:38-39).

自分を讒訴する者たちに直面した時、イエス(カペナウムの漁村に本部を置く宗教運動の創設者)は逮捕に抵抗しないことを選んだ。また、彼はヘロデとピラトの前で自らを防衛しないことを選んだ。最も予期外だったのは、彼を讒訴する者たちからペテン師として、権力に飢えた人間と見られていたイエスが、十字架上ではりつけにして彼を殺そうとした者たちを赦してくださいと神にお願いしたことであった。イエスが明らかな証拠によってというよりも、むしろ大衆の抗議によってなされた拷問と死刑宣告を黙認したことを平和主義者たちは、イエスの公生涯の最も重要なメッセージの一つとして、また、真のキリスト教徒が見習うべきである行為であると解釈するようになった。イエスの生涯をこのように解釈することを支持する人々は、キリスト教徒は戦争に反対するべきであり、そのような抵抗の結果として起こり得ることに対して覚悟すべきであると主張した。絶対平和主義者と知られる人々は、暴力によって悪とデマに抵抗することを拒否した

が故に、彼らと子孫たちが恐ろしい結果に直面しなければならなくなるかも知れないことを認識していた。

キリスト教の伝統の中では、絶対平和主義への献身こそが、初期の多くのキリスト教徒がローマによる抑圧に対する抵抗を抑えることを選んだ理由であると説明されるかもしれない。彼らはコロシウムで彼らとその子供たちを待っていた悲劇的な運命を迎え入れたのであった。ボヘミアのクリスチャン作家で活動家であったヘルクチスキー(Petr Helchtisky,1390-1460) はポスト・コンスタンチヌス時代の教会に対して率直に批判した。彼はいかなる目的を達成するためであれ、暴力を使用することは最大の悪であると見なした。ヘルクチスキーの見解では、キリスト教は十字架に導かれて西暦 312 年にライバルで皇帝を名乗るマクセンティウスに対して戦いを挑んで勝利したコンスタンティヌスによって腐敗することになったというのである。ヘルクチスキーの絶対平和主義は、一定の人々が共鳴して支持し、何世紀かの後にレオ・トルストイ(1828-1910)に強い影響を与え、また、マハトマ・ガンジー(1869-1948)にも影響を与えた。ガンジーは非暴力の抵抗運動を実験した初期においては尊敬するトルストイと頻りに文通した。

平和主義に対する同じような献身はインドのジャイナ教のアヒムサ(「危害を加えない」)の伝統の中にも見られる。この見解はある程度ヒンズー教徒も抱いているし、また、仏教徒の共同体の中にも見られる。それが多くの人々に知られるようになったのは、インドの主にジャイナ教徒が多くいたグジャラト地方で成長したガンジーがアヒムサを彼のサトヤグラハ(Satyagraha)運動の指導原理にしてからであった。サトヤグラハとは「真実の主張」を意味する。ガンジーは、平和的な行動を強調し、抑圧に対しては非暴力の抵抗を呼びかけた。にもかかわらず、ガンジー自身は絶対平和主義者ではなかった。彼は軍事的対応の余地はあるという気持ちを抱いていて、ボーア戦争と第一次世界大戦ではイギリス軍を支持したが、彼がこれらの軍事行動のために募集したインド人の大部分は衛生兵として従軍したのであり、南アフリカのズル―戦争ではガンジー自身もその中にいた。

このように、ガンジーはトルストイのような絶対平和主義者ではなかった。ガンジーは価値の序列に関しては、抑圧に対する暴力的な対応の方が抑圧的で屈辱的な状態に服従したり受諾するよりは好ましいと考えていた。ガンジーはこの問題に対する自己の立場を、著書「非暴力の福音書」の中で、次のように述べている。

「私の非暴力は危険から逃げて、愛する者を保護されない状態のままにしておくことを認めない。暴力と臆病な逃避の間では、私は臆病より暴力を好むことができるだけである。私が臆病者に非暴力を説教することができないのは、健全な風景を楽しむように盲人を誘惑することができないのと同じだ。非暴力は勇気の頂点である。」<sup>4</sup>

ガンジーの非暴力は目的に駆られる非暴力であると理解するのがベストであろう。そして、ガンジーは最も高貴な目標は戦争によってよりも、むしろ非暴力によって達成されると信じていた。クラウゼビッツは「戦争は他の手段による政策の継続であるにすぎない。」と、主張した。ガンジーは、非暴力もまた「他の手段による政策の継続」であるという前提に基づいて行動したのである。

ガンジーの平和へのアプローチには、二つの面があった。その第一は、相手の善意に訴えるための前

向きで情愛深い態度であった。そのことをガンジーは深く信じていた。第二は、支配している政府に対して不当な法律や政策を撤廃するように圧力を加えるために不服従の戦術を実施することであった。南アフリカにおけるヒンズー教徒とイスラム教徒の結婚を認めることであり、インドにおける自己決定権であり、抑圧者の善良さと人の感情の制御に対する信仰の内的規律がガンジーの活動において不変の状態になった。

ガンジーの市民不服従の行為は、ガンジーとその追従者が力で抑え込まれた時でさえ、非暴力主義であった。不当な法律や抑圧には代価が必要であるというメッセージを送るために、ガンジーは、市民不服従の行動を選んだ。ガンジーは抑圧に責任がある人々の財布に影響を与える方法として、ストライキやボイコットを使用した。同時に、ガンジーは他のすべての法律や儀礼は完全に遵守することを主張した。ガンジーは、自分と追従者たちが人種隔離と不平等を維持するために使用される不当な法律に対して以外は模範的市民であるように求めた。

ガンジーはマーチン・ルーサー・キング博士がアフリカ系アメリカ人のために平等の権利を促進するために非暴力の運動を行う努力に主要な影響を与えた一人であった。キング博士はガンジーのアプローチと同様な方法を用いた。彼は自分の支持者側の内部の規律と自浄作用の重要性を主張した。もし彼の追従者たちが攻撃犬、消火ホース、警棒、ゴム弾の猛攻撃に抵抗するのに必要な規律を欠いていたら、抗議活動には参加しないようにキングは求めた。

キングは彼の行進が非暴力主義のままで残るものにしようとして決意していた。キングが公民権運動に対する広範囲な支持を獲得できたのは、彼の深く感動的なスピーチ（しばしばアメリカの建国の際の文書とともに聖書からの引用を用いた）と抵抗運動の平和的な性格の故であった。ガンジーと同じように、究極的にキングは初めは社会への脅威と見なしていた人々の愛と敬意を勝ち取った。抗議行動において、キング博士は直接行動と呼ぶものを使用した。アフリカ系アメリカ人のために公民権を進めるキングの野心的なやり方に批判的なキリスト教聖職者たちへの返答としてバーミンガム監獄から彼が書いた手紙の中で、キングは、黒人がアメリカの南部その他の地域で直面していた隔離と偏見を終わらせようとする努力において彼が活用した四つの段階<sup>6</sup>について以下のように概説した。

1. 不正義が存在しているか否かを決定する事実の収集
2. 交渉（不正義に取り組んでそれら正すために、責任がある当事者との交渉）
3. 自浄作用(非暴力の行動に関与する前の自己の浄化: 心の中の平和が敵からの乱暴な反応に対する非暴力の対応を確かなものとするための安定化する力として役立つようにするため)。
4. 直接的な活動

同じスピーチで、キング博士は以下の直接行動の目的について次のように説明した:

非暴力の直接行動は、危機を作り出して、これまでいつも交渉を拒否してきた地域社会がこの問題に直面せざるを得なくなるような緊張状態をつくることを追及する。それはその問題を劇的にして、

もはや無視できなくなるようにすることを追及する。<sup>7</sup>

\*\*\*

非暴力運動の社会改革の潜在的可能性と本当の目標及び平和学におけるその指導者たちの社会的地位と意図について見直したことがない人は、その本当の意味について理解しない。彼らは、例えば社会の不公正や貧困に対処する必要性を主張するだろうが、そのような社会の不公正に対処するために誰を念頭においているであろうか？ 本質的には権力を持っている人たちである。非暴力の目標は単に社会問題に対処するのみでなく、もっと重要なこととして、現体制を変革することである。ガンジーの目標はインドの社会的状態を改善することではなく、インドの英国からの独立を達成することであった。マーチン・ルーサー・キングの役割は、食べ物を提供することによって少数者の状態を改善することではなかった。彼の意図は、何よりも、アフリカ系アメリカ人のための完全な公民権を獲得し、アメリカの多くの地域において見られた白人による黒人の法的抑圧を終わらせることであった。これらは暴力または平和的手段で達成できる目標である。ガンジーとキングは二人とも指示された非暴力を選んだ。そして、結局、彼らは生命を失ったが、目標は達成したのである。

## 平和の哲学と社会科学

外交は長い間、ある国が他の国々との関係において、その政治的および経済的関心事に対処するために試みる様式として行われてきた。外交努力が失敗するときは、その国の利益を実現するためにクラウゼビッツのいう軍事的選択に向かう。アルゼンチンが長い外交の行き詰まりの後で、イギリスが支配するフォークランド諸島を占領したとき、イギリスはアルゼンチンにその領土から引き下がるようにきびしく警告した。アルゼンチンがそれを拒否すると、イギリスはアルゼンチンに軍事的に対応した。

国家間の平和な関係に役に立つような国際情勢を作り出そうとする試みから、様々な国際組織が設立された。主に二つの展開が生じる結果となった。その一つは、ヨーロッパにおける政治経済関係のガイドラインとなる条約や協定の歴史となった。第二の構想は平和を維持するのに必要な条件を特定し、合意に至るように願う諸国の増大する願望を反映していた。

イマヌエル・カントはその全生涯を出生地のケーニヒベルクで過ごしたが、永久平和に関する彼の著作は国際法と国際組織を通して平和を形成するための枠組みとして貢献した。カントのいう枠組みの重要な一面は、国家間の貿易が平和の促進に果たすことができる役割を認識することであった。興味深いことに、カントが提案した貿易の役割は、平和に焦点を当てる組織と社会正義の促進を目指す組織、すなわち、社会主義団体間で合意を確立する妨げとなった。社会主義者や社会民主主義者は自由貿易は彼らが強く反対する資本主義を継続的に成長させる手段であるとみなした。平和団体が平和と正義の間には不可避の関係が存在するという概念を受け入れることができるまでには、それは何十年もかかるであろう。

19世紀及び20世紀初期の平和運動は、ガンジー博士とキング博士の成功に続いて展開した諸運動や数年にわたるベトナム戦争の結果生じた深遠な文化の変化と同じレベルの卓越さは決して達成しなかった。それにもかかわらず、1950年代の半ばまでに、平和は概説し、評価し、分析することができる研究

のテーマと見なされ始めていた。エマ・スチュワートは平和の研究が社会科学として活発化するのに役立つ根本的な発展の内の二つについて以下のように簡潔に説明している。

ケネス・ボールドディング、(1959年に紛争解決ジャーナルを創刊し、1957年にミシガン大学紛争解決研究センター創設した)は、研究と早期警戒システムの開発によって紛争を防止することを早くから提唱した人であった。ヨーロッパでは、ジョハン・ガルトウングが1960年にオスロ大学に大学と紛争と平和に関する研究ユニット(現在のPRIO、国際平和研究所、the International Peace Research Institute)を設立し、1964年に「平和研究ジャーナル」(the Journal of Peace Research)を創刊した。<sup>8</sup>

平和研究は正にこの時点から一層正確な社会科学として現れた。ガルトウングは「否定的平和」(暴力は不在だが、そのような暴力を引き起こした状態は残っている)と「積極的な平和」(最初に暴力を引き起こした根本的な状態に対する対処なされた平和)などの概念を紹介した。ガルトウングはまた、「制度的暴力」という用語をつくった。社会状態を概説するガルトウングのやり方は、社会な革命につながるとマルクスは主張した。マイケル・S・ランドの紛争曲線(Curve of Conflict)は暴力の階層構造の各レベルでの関係を分類できるようにするインディケーターだけでなく、各国家間の関係の階層構造を提供する。ランドはまた、潜在可能性のある紛争を予期して、希望として防止することができる方法を洞察する。紛争防止、紛争管理、紛争変革、平和維持、平和調停、および平和構築はすべて紛争の拡散と紛争終結のプロセスにおける重要なステップを代表する。また、成熟、この作用、主要な当事者、スポイラーなどの用語はすべて平和学の増加する語彙において特別な意味を持っている。

今日、オスロ大学(ノルウェー)や、ノートルダム大学、ジョージ・メイソン大学や、ケネソー州立大学(米国)、ブラッドフォード大学(イギリス)、ニューイングランド大学(オーストラリア)などの大学は、平和学又は紛争変革の最終学位を提供している。世界で南スーダン、ソロモン諸島、ネパール、およびコスタリカの四ヶ国が平和省を設立した。アメリカでは、アメリカ平和研究所は平和を目指す構想開発を一般大衆と外交官を教育することに焦点を合せており、その研究所は時として、紛争に対応するための代替外交ルートとして奉仕することができる。

ここで私は、統一思想、文師の平和哲学、および彼の哲学の現実の応用がどのように平和または平和学の促進に貢献をしたかについて、十の例を強調したい。

## 1. 紛争の解決から紛争の転換へ

平和と和解のための模範として、平和学者で実践家のジョン・ポール・レデラックは紛争の転換を強調した。レデラックにとって、鍵は単に目前の論争や暴力を終わらせるだけでなく、お互いを敵とみなす当事者間に建設的で持続する関係を築く方法を追及することである。ますます平和研究はその注目を紛争の転換に移してきた。紛争の転換は単に紛争の原因となる問題のみに焦点を合わせるのではない。その代わりに、当事者を互いに敵とする紛争へ導く根本的原因に対処することに焦点を合わせる。紛争の転換は、その焦点として、敵がいずれはパートナーとなり、さらには友人にさえなることができる道を見る。紛争の転換の最善の例の一つは、ヨーロッパ連合の形成につながった過程である。

マイケル・ランドの紛争の曲線は戦争から彼が継続する平和と呼ぶもの にいたるスペクトルに基づく国家間の関係を査定する。彼は自分が持続する平和として言及するものとして、カナダとアメリカの関係について語る。カナダとアメリカの間では確かに違いは異なるが、それでも関係は容易に違反できない絆となる友情として知覚される。驚くべきことに、ドイツとフランスは 1944 年には戦争状態にあったし、両国は 1916 年と 1870 年と 1815 年にも同じ状態にあった。軍用機械の建設に必要な主要な構成要素であった石炭と鉄鋼の生産を統合するというフランスのロバート・シューマン外務大臣のインスピレーションがなかったら、紛争のための種が再び蒔かれたかもしれない。そこから、ヨーロッパ連合が生まれ、以前の戦争状態は長持ちする平和に取って変わられたのである。

文師の焦点は常に長持ちする平和(Durable Peace)として平和学で知られてきたことであった。確かに、ヤコブがエサウに勝利し、憎しみから愛の関係へ変化をもたらした話は、信仰基台の構築を通して、不正義に対処するに必要であるとマーチン・ルーサー・キング博士が語ったような内的統制へ導くだけでなく、敵の心を勝ち得て長続きする平和の達成へ導く豊かな洞察を提供する。それ以上に、1990 年代初期の慰安婦に関する裁判の最初から始まった日本と韓国の女性間のブリッジ・セレモニーは、日本人と韓国人のカップルの結婚、白人と黒人の結婚、さらには結婚によるロシアとアメリカ間の和解を呼びかけた文師の提言は、敵意を愛によって変えようとする呼びかけを反映するものである。文師が説明したように、「ロシアとアメリカが異文化間の結婚に参加するとき、世界は完全に解放されるであろう」。交叉結婚を通して、紛争中の二つの国民が永遠に一つになる道が開かれる。

ヤコブ-エサウの関係についての文師の分析は紛争転換の真の意味に関する洞察を提供する。ヤコブは兄のエサウなしに神の前に立つことはできないことを深く理解していた。彼はその関係を癒すためにできることをすべてをしなければならぬことを認識して、自分の生命と家族の生命、ハランで大きな難局に直面しながら獲得した経済的基盤をも賭けたのであった。文師によるそのような過程の分析は俗化された世界では忘れられてしまった紛争転換の挑戦に対する洞察を提供する。イギリスがガンジーを叱責したとき、彼は追従者を指導して断食した。1919 年にガンジーの何人かの追従者が非暴力の抵抗よりむしろ暴力を選んだとき、ガンジーは、悔い改めて断食することを選んだ。結局、彼の態度は成功し、インドとパキスタンは独立を獲得した。

統一思想は、私たちが犠牲の道、自己否定の道、神の観点を求める道を行くことによって、対象意識を獲得し、神の心を感じ、神の知恵を相続し、思慮と効果をもって行動できるのだ、と言うであろう。ロバート・ムガベとネルソン・マンデラはジンバブエと南アフリカでそれぞれ勝利したが、どういうわけかマンデラの何年にもわたる獄中での苦労は彼をつらくする原因とはならなかった。彼は自分の国と圧迫されている人々に対する愛を育て、将来の挑戦についての彼の理解は、平和的な移行と経済の安定と成長を確かなものとするためには、ヨーロッパ人を南アフリカに残しておく重要性を認識するように導いた。ムガベにはそのような洞察が欠如していたために、ジンバブエは政治と経済が依然としてよろよろ歩きのままである。

## 2. 平和学とヤコブ路程に関する文師の教えと応用の意義

しかし、統一原理の中で説明されているヤコブ路程は、いかなる平和学の学者が発見したことにも基づいていないことを付け加えたい。ヤコブ路程は1954年に初めて公けにされたそのような研究のほとんどに先行するものである。にもかかわらず、ヤコブが兄のエサウに手を差し伸べたやり方と紛争の解決と転換において使用したテクニックには多数の類似点がある。

## 平和心理学と内的平和と自浄作用の重要性

マーチン・ルーサー・キングとマハトマ・ガンジーの場合、挑戦に対処する際に自制と平和的な振る舞いが必要だとの認識があった。デヴィッド・バラシュとチャールズ・ウィーベルはガンジーのサティグラハ (Satyagraha) の哲学の根本にあるアヒムサ(非暴力)のインドの視点について次のように説明する。

非暴力は他人に対する深い敬意と共感と親切の主張だけでなく、絶対に動揺しない断固さをも必要とする。」非暴力は柔和、温和、引っ込み思案ではない。それは各個人が自分に地球を改革する責任を引き受けさせ、必然的にその過程において苦しむことを行う意欲を意味する。<sup>10</sup>

非暴力はまたリーダーシップと平和研究の重要な一部である交渉にも応用できる。平和の実践者は自己の個人的履歴を熟考する必要がある。彼らは道徳的な離脱、意味論的人間性抹殺を含む暴力の犠牲者の人間性抹殺の状況から自らを遠ざけることの不利な結果をよく考える必要がある。<sup>11</sup>ウィリアム・ユーリーは、“Getting Past No”の中で、ないがしろにされると感じられる対人交流におけるダメージを与える感情を解き放つのを避けるために「バルコニーに行く」必要性について語っている。

創世記32章はヤコブが兄のエサウに会うのを準備することに関して述べている。彼は野営地を見つける。その場所で彼は二人の天使に出会い、その野営地をメナハイム、すなわち、「神の野営地」と名付ける。ヤコブは自分のしもべたちに、エサウの前で彼(ヤコブ)について話すときは、ヤコブのことを「あなたのしもべであるヤコブ」と言及するように指示する。そして、エサウに捧げる贈り物を家畜の中から準備する。ヤコブは、自己の心を備え、兄の前で自己を卑下するための言葉づかいさえも準備する。

ヤコブは神と対話して、エサウとの出会いに際して自分の生命を助けてくれるように神にお願いして、次のように語る。

「父アブラハムの神、父イサクの神よ、かつてわたしに『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け、わたしはおまえを恵もう。』と言われた。<sup>10</sup> 主よ、あなたがしもべに施されたすべての恵みとまことをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、杖のほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました。どうぞ、兄エサウの手から私をお救いください。わたしは彼がきて、わたしを撃ち、母や子供たちにまで及ぶのを恐れます。あなたは、かつて、『わたしは必ずあなたを恵み、おまえの子孫を海の砂の数えがたいほど多くしよう』と言われました。』(創世記32章: 9-12)

出会いの前の夜、ヤコブは「ひとりの人」すなわち天使と組打ちをする。(創世記32章 22-30) 天使に勝利すると、彼は自分を祝福するように天使に頼み、歓喜して言う。「わたしは顔と顔をあわせて神を見た



が、なおわたしは生きている。」(創世記 32:30) 興味深いことに、これらの言葉は彼が兄エサウに会った時に言う言葉と同じである。「あなたが喜んでわたしを迎えてくださるので、あなたの顔を見て、神の顔を見るように思います。」(創世記 33:10) これらのことから、ヤコブが兄に会う前に、霊的な浄めをしていたのは明らかである。これはガンジーとマーチン・ルーサー・キングが市民的不服従に従事する前に、自己の浄めをしたと述べていることと同様である。

ヤコブは先ず、自分と平安になり、兄のエサウに対する深い愛を示すことから始めた。ヤコブは、エサウとの唯一の決定的な解決は平和的なものでなければならないことを理解していたのである。これらの点において、統一思想は、平和に対する内的な心構えがいかに紛争の解決にとって鍵であるかを理解する助けとなる。

### 3. 平和推進におけるトラックⅡの外交と文師によるこの方式の活用と貢献

トラックⅠの外交とは、通常は外務省を通して行われる公式な国家間関係のことである。しかし、外交にはそれを補う二つの代替様式がある。トラックⅡの外交とトラックⅢの外交がそれである。トラックⅡの外交使節は通常は、一国の以前のまたは引退した高位の政府高官がもう一つの国の現職または元職の政府高官と交渉を行う場合である。トラックⅡの話し合いは、明確な政府提案ではない解決策を「浮かせる」のに役立つ。その過程でなされた提案を浮かせ、フィードバックすることによって、「解決困難な紛争」と認識されていた案件に対する実際のトラックⅠの解決に至るかもしれない。1992年、文師は、約30人の元政府高官からなる代表団を韓国訪問に招待し、朝鮮民主主義人民共和国(DPRK)とアメリカの間の絆とコミュニケーションを奨励しようと試みた。これは一つの解決へとつながり、それによって、金日成主席とDPRKが毎年実施している反米月間を終了することに同意したのであった。

### 4. トラックⅢの外交と文師夫妻によるこの方式の活用と貢献

トラックⅢの外交は、即座のそして特定の成果を追求するものではない。それは、紛争相手国の学生、専門家、労働者その他のグループとの間をつなぐ活動に参加することによって、紛争当事者がお互いを人類家族の一員として見ることができるようにする手段として役立つ。4年毎に開催されるオリンピックは、トラックⅢの市民外交の好例である。文師は特に数多くのトラックⅢの市民外交に関与しておられた。例えば、イスラエルとパレスチナへ、又、旧ソ連と北朝鮮を訪問する事実調査旅行をしばしば主催した。これらの取り組みは文化の共有を奨励し、又、対立する国家の市民間の交流を促進し、共通の人間性の発見と共有を可能にした。文師夫妻によるトラックⅢイニシアチブの中でも最も重要なものは、毎年のスポーツ祭典であり、これは祝福結婚でクライマックスに達した。そこではかつては互いに敵とみなした国の国民の間の国際結婚がしばしば行われた。文師は日本人とアメリカ人、日本人と韓国人の間の祝福結婚式を何千回も行った。

### 5. 経済と政治の統合による平和:この分野に対する創始者の貢献の例

疑いもなく、紛争転換の最も例示的な事例の一つは、第二次世界大戦後に起こった。それはロバート・

シューマン、ジーン・モネ、コンラッド・アデナウアーが紛争を「解決」するのではなく、将来の戦争の可能性を大いに減少させるような持続する関係を構築することを追及したことであった。彼らは、武器生産のための鍵となる資源たる石炭と鉄鋼の生産におけるパートナーシップを共有しようと決意した。1951年に、フランスのシューマン外務大臣とドイツのアデナウアー首相はヨーロッパ石炭鉄鋼共同体(ECSC)を創設した。これがやがては欧州経済共同体(EEC)へと拡大し、その後、今日のヨーロッパ連合(EU)へと発展した。フランスとドイツのこれらの指導者たちは持続する平和を確かなものとするためには、協定に署名すること以上のことが必要であることを悟るようになった。彼らの努力によって、以前の敵国が単なる和解に成功しただけではなかった。長期の非常に生産的で、互いに有益かつ平和な関係を築き上げたのである。

長年のライバルであったドイツとフランスが、鉄鋼生産の監視における協力に同意したという事実は劇的に重要なことであった。石炭と鉄鋼に関する経済協定の樹立は、1957年のローマ条約につながり、そして、それは欧州共同市場を創設する結果となったのである。文師はアジア太平洋地域の統合を促進する仕事に関与したのみでなく、1983年にラテン・アメリカ統合協会(AULA, Association for the Unity of Latin America)を創設して、ラテン・アメリカの政治経済統合の促進を目指すイニシアチブにも関与した。1983年のAULA創設のイニシアチブは、トラックIIのイニシアチブであり、これはラテン・アメリカの元首脳その他の高官を集めてラテン・アメリカ共同市場の構築を探求し、ラテン・アメリカが貿易その他関連のある諸問題に対処するためのブロックとして機能するようにしようとするものであった。この組織は無数の会議を開催した。その中には憲法草案の起草さえ検討する会議もあった。AULAはメルコスール(MERCOSUR)の姿を予示する。メルコスールは、初期の歴史においてラテン・アメリカの南部から始まり、全体の政治経済の統合を促進し、中南米経済を強化するために重要な役割を果たした。文師はその地域で多くの時間を過ごされた。

## 6. 平和と紛争研究の熟成の概念と統一思想との関連性

紛争解析の主要な面の一つは、紛争に対処するかそれを終わらせるための機会が生じる瞬間を認識できることから成る。例えば、1865年4月に、北軍がリッチモンドとピーターズバーグに進軍したとき、リー将軍はついに南部連合の不可避的な降伏を遅らせるために、もはや何もできないという結論に到達した。1865年4月20日、南部連合の大統領ジェファーソン・デイヴィス宛の手紙の中で、彼は以下のように締めくくった。「無駄に血を流すのを止めるため、私は戦闘停止と平和を回復する措置を取るよう勧告する。」

13

紛争は成熟の瞬間が起こるときに終わる。すなわち、当事者の一方または双方が、紛争の追及は予期した成果をもたらさなかったことを認めるようになり、降伏または交渉による和解の方が継続して生命を喪失するよりも良い選択肢であろうと認めるときである。しかし通常は、無条件降伏の場合を除いては、戦争の終結を求める当事者は自己の手を強めるための少なくとも何らかの梃子(てこ)を持ってテーブルに着くようになるものである。ヤコブとエサウはそれぞれ自分のてこを持っていた。ヤコブには富があり、エサウには軍事力があつた。しかし、文師と金日成主席のように、二人の兄弟は、「血は水よりも濃い。」という結論を下したのであった。

「解決困難な紛争の制御」(Taming Intractable Conflicts)の中で、作者のチェスター・クロッカーとパメラ・エールは、「当事者は戦い続ける代価が利益よりも重くなり始めるときに、政治的解決を目指す。」と述べている。<sup>15</sup> ハランの20年後に、ヤコブは神に戻るようという指示を受けた。「主はヤコブに言われた。『あなたの先祖の国へ帰り、親族のもとに行きなさい。わたしはあなたと共にいるであろう』。(創世記31:3) ヤコブは、今や兄に手を差し伸べるべき時であることを理解した。そして、彼がハランで過ごした時間およびそれ以前の期間に、彼の父、母、おじのラバン、彼の妻たちおよび彼の義理の兄弟たちに対応する際に開発していた多くの外交的スキルを利用してそうするための準備をした。ソ連の終焉によって、金日成は冷戦の政治的限界を超えて見始めるようになった。文師との会見は、実質的かつ象徴的な意味があった。金主席は共産主義と(マルクス・レーニン主義を金が応用した)主体思想を遠慮なく批判していた文師と対座する意欲を示すことによって、政治的姿勢の変化を示したのであった。

## 7. 立場対利害:統一思想との関連性

交渉に関する教科書、ウィリアム・ユーリー著の「イエス(了解)に至る」(*Getting to Yes*)は、多くの紛争が、立場と利害を解説しないが故に結果として生じるものであることを強調する。創世記の中の兄と弟の潜在的対立関係のそれぞれの出発点は、神が立てる必要があった地位に基づいていた。カインとアベルに始まって、兄と弟の立場が逆転する。ヤコブの場合、これは神がヤコブを愛し、エサウを憎んだ子宮の中から始まった。二人の兄弟の立場は、ヤコブが兄のエサウの代わりにイサクの祝福を受けた時に、完全に逆転した。創世記27:37で、イサクは息子のエサウに言った。イサクはエサウに答えて言った。「わたしは彼をあなたの主人とし、兄弟たちを皆、しもべとして彼に与え、また穀物とぶどう酒を彼に授けた。わが子よ、今となっては、あなたのために何ができようか。」

にもかかわらず、摂理歴史の観点からは、エサウにとって、弟が神に選ばれた者の立場で成功することは、エサウの利益のためであった。神はヤコブの中に、神の命令を真剣に受け止め、来たるべきメシア・イエスを中心として神との最終的な和解に向かう道に、エサウを含む人類を導くのに必要であった粘り強さ、忍耐力、孝行心、および同情心を持っている者を見出していたのであった。エサウがこのことを完全に理解していたかどうかは、聖書の記述からは明確ではない。しかし、彼が涙で弟を抱くことができたという事実は、彼が弟の心の中に善良さ、親孝行の愛、および尊敬心を感じたことを示唆している。おそらく母親レベッカは、ヤコブがイサクの祝福を奪う<sup>17</sup> ようにする責任を持つことを約束していたので、ヤコブの反対を抑えてイサクの祝福を奪うようにヤコブの背を押したことをエサウに説明していたのであろう。<sup>18</sup>

## 8. 相互利益のためのオプション(選択)

「イエスに至る」は、また、交渉に入るときに相互に利益を得るためのオプションを探す必要があることを強調する。ヤコブはエサウを受け入れることによって自分が祝福されることをエサウに示す必要があることを理解していた。ヤコブは自分の立場を誇示することはしなかった。意識的か否かに関わらず、ヤコブは不満を抱いていた兄に、カイン-アベル問題の解決を通して、ヤコブの状況のみでなく、エサウの状況の改善も可能になることを示した創世記における最初の人であった。創世記33章3-7で、ヤコブは依然としてエサウを兄として尊敬していることをエサウに明らかにしている。エサウに近づく際に、ヤコブはエサウ

の前で七度平身低頭して敬拝した。エサウに挨拶する際、ヤコブは自分を「あなたの召使い」と言っているが、これはイサクがエサウはヤコブの召使いになるであろうと予言したという創世記27章37節の記述と明らかに対比できることである。

彼は先へ進んで兄に近づくと、七度平身低頭して敬拝した。しかし、エサウはヤコブに会いに走って来て、彼を抱いた。そして、自分の腕をヤコブの首の周り伸ばしてヤコブにキスした。そして、彼らは泣いた。次に、エサウは見上げて、女と子供たちを見た。彼は、「あなたと共にいるこれらはだれか?」と尋ねた。ヤコブは、「神がありたくもあなたの召使いに下さった子供です。」と答えた。それから女性の召使いたちとその子供が近づいて敬拝した。次に、レアとその子供たちが来て敬拝した。最後に、ヨセフとラケルも来て敬拝した。<sup>19</sup>

## 9. 統一思想の平和哲学における梃子(てこ)とその役割

交渉状況に関与している者は軍事、経済、政治および道義的ないかなる資産が交渉相手にとって関心があるかについて認識している必要がある。交渉相手のてこは、脅威または機会を表す可能性がある。1978年9月17日に調印されたキャンプ・デイビッド合意につながった段階において、イスラエルとエジプトは和解が彼らの利益になる道筋についてははっきりと理解していた。イスラエルにとって、エジプトがイスラエルを外交的に承認することは、中東における国家としてのイスラエルの正当性を確立するのに役立つことは明確であった。

かくしてエジプトには政治的梃子(てこ)があったのである。その上、合意の調印はサダト大統領の前任者、ナセル大統領(Gamal Abdul Nasse, 1956-1970)のための結集点として機能したエジプトとの軍事的対決の長い歴史を終わらせる。したがって、エジプトにも軍事的てこがあった。イスラエルがエジプトに対して持っていたてこは、アメリカとの同盟及び1967年の六日戦争以来エジプトのシナイ砂漠に対する支配の二つから生じるものであった。

サダトはイスラエルとの和解はエジプトがシナイ半島をエジプトの支配に返還することを保証するための手段であり、エジプトがアメリカと新しい政治的、経済的結びつきを確立する機会であるとみなした。

エジプトとイスラエルには、それぞれが二国間関係を追求する強い理由があった。また、エジプトとイスラエルの間の平和は、イスラエルの安全の唯一の保証人であるアメリカに大きくアピールするものであった。地域の安定に対するアメリカの利害は毎年イスラエルとエジプトの両方への対外援助で何十億ドルにもなるであろう。エジプトとイスラエルの和解によって、アメリカはもはやイスラエルが中東で存在する権利を支持する「一匹狼」ではなくなるであろう。この地域にエジプトというパートナーができるだろう。また、エジプトとの新しい結びつきの約束は、拡散しつつあったソ連のエジプトとの軍事的経済的結びつきが断ち切られることを意味するだろう。アメリカは、中東にエジプトという新しいパートナーを持つことになり、それは冷戦の最後の10年間における重要な資産として役立つであろう。

ヤコブは明確に梃子(てこ)の力を理解していた。エサウは、ヤコブがイサクの祝福を獲得するためにな

したことでヤコブを赦し、是認することができる人であった。ヤコブはエサウが自分を受け入れてくれることが必要であった。エサウとヤコブは二人とも和解が亀裂を解決し、イサク家を再び一つにするであろうことを理解していた。かくしてヤコブは慎重にエサウとの会見の準備をした。エサウは 400 人の兵士をつれてヤコブとの会見の場にやって来た。ヤコブがまた自分をだまして、今度は自分を完全に排除することを計画していることを恐れていたからである。エサウに対するヤコブの対応は彼が心のでこ、すなわち「道徳的なてこ」<sup>20</sup> を使用する能力を持っていることを示した。彼は武器をもって兄に近づくことをしなかった。彼は兵士よりもむしろ家族をつれて兄の前に来た。ヤコブはエサウが自分の「主人」であり年長者であると認めることによって、エサウの威厳を回復した。彼は 200 匹の雌ヤギ、20 匹の雄ヤギ、200 匹の雌羊、20 匹の雄羊、30 頭の雌のラクダとその子たち、40 頭の雌牛と 10 頭の雄牛、20 頭の雌口バと 10 頭の雄口バをエサウに捧げた。そうする際に、ヤコブには明確な意図があった。「私は前もって送るこれらの贈り物によって彼をなだめるつもりだ。後で私が彼に会うとき、おそらく彼は私を受け入れるだろう。」<sup>22</sup>

正に、軍事力だけを持って来たエサウは、ヤコブの信頼構築のジェスチャーによって武装解除された。力の源として武器だけに頼ったままでいる代わりに、彼はヤコブが本当に求めていた力を捧げた。エサウは過去を忘れることを選択し、ヤコブと和解した。エサウは走って行ってヤコブに会い、彼を抱擁した。彼は腕で首を抱き、二人は泣いた。<sup>23</sup>

#### 10. バトナ(BATNA, Best Alternative to a Negotiated Agreement) (交渉で得られた同意に対する最善の代替策)の決意と統一主義の平和哲学におけるその役割

ある交渉に入るとき、どのような譲歩や妥協がなされるか可能性があるかを認識しなければならない。また、合意に至ることが可能でなければ、選択肢を決定しなければならない。そのオプションについては、効果的な交渉に関する有名な教科書、「イエスへの到達」の著者ウィリアム・ユージーが BATNA (Best Alternative to a Negotiated Agreement 交渉で得られた同意に対する最善の代替策)として言及している。人は BATNA を知り、また、交渉相手の BATNA を予期しなければならないのである。

エサウは 400 人の軍隊と共にヤコブに会いに来た。これは、エサウが、ヤコブを攻撃する計画であったことを意味したであろうか？ 必ずしもそうではない。しかし、それは兄が彼を攻撃するかもしれない可能性を軽視しないことを選んだことを意味したので、軍隊の使用はエサウの BATNA であった。

ヤコブにとって、エサウにとってと同様に、仲直りしたいと切望する願望があった。しかし、ヤコブもまた自分の氏族を分けて、攻撃された際には少なくとも一部は逃げることができるようにすることによって、一族を守る措置を実施した。ヤコブにとっては、兄と和解しなければならないか、あるいは生命を犠牲にしなければならないかを理解していたのかもしれない。しかし、エサウに会うのを準備したとき、ヤコブは子供たちが自分の後ろから三つのグループに分かれてついてくるように組織化した。

最初のグループは彼のめかけたちと彼女たちに生ませた子供たちから成っていた。二番目のグループは妻のレアとその子供たちから成っていた。三番目のグループはラケル、ヨセフ、および弟のベニヤミンから成っていた。(創世記 33 章:1-2) 明らかに、三番目のグループが、彼が最も好んでいた家族であった。

彼らは、危険が最も少なく、最も逃げやすい者たちであった。(創世記 33: 1-4)。自分が死ななければならなかったとしても、家族の少なくともその一部を生かしておくことが、ヤコブの BATNA であった。

## 結論

この論文の始めに言及したように、平和学は第二次世界大戦後まもなくして以来、現代の学問の一分野として存在してきた。本論文は、平和運動と統一思想が多くの共通の原則を共有しており、平和の促進と暴力がより少なく、究極的には平和な世界の構築において協力できる可能性があるということを示すことを希望として示すものである。

## Notes:

1. Carl von Clausewitz, *On War* vol. I, (Gutenberg EBook #1946: 2006), <http://www.gutenberg.org/files/1946/1946-h/1946-h.htm>, retrieved on December 8, 2012.
2. Brian Orend, "War", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Fall 2008 Edition)*, Edward N. Zalta (ed.), <http://plato.stanford.edu/archives/fall2008/entries/war/>, retrieved on December 8, 2012.
3. *Satya* means "truth" and *Agraha* means "insistence."
4. M. K. Gandhi, "The Gospel of Non-Violence by Mohandas Gandhi," <http://www.mkgandhi.org/nonviolence/phil1.htm>; retrieved on May 19, 2012.
5. Carl von Clausewitz, *On War* vol. I, (Gutenberg EBook #1946: 2006), <http://www.gutenberg.org/files/1946/1946-h/1946-h.htm>, retrieved on December 8, 2012.
6. *African Studies Center—University of Pennsylvania*, "Letter from a Birmingham Jail" by Dr. Martin Luther King, Jr., April 16, 1963, [http://www.africa.upenn.edu/Articles\\_Gen/Letter\\_Birmingham.html](http://www.africa.upenn.edu/Articles_Gen/Letter_Birmingham.html), retrieved on May 18, 2012.
7. *African Studies Center—University of Pennsylvania*, "Letter from a Birmingham Jail" by Dr. Martin Luther King, Jr., April 16, 1963, [http://www.africa.upenn.edu/Articles\\_Gen/Letter\\_Birmingham.html](http://www.africa.upenn.edu/Articles_Gen/Letter_Birmingham.html), retrieved on May 18, 2012.
8. *Peace Studies Journal*, "Conflict Prevention: Consensus or Confusion?" by Emma Stewart, retrieved at [www.peacestudiesjournal.org.uk/dl/ConflictPrevention.PDF](http://www.peacestudiesjournal.org.uk/dl/ConflictPrevention.PDF) on May 19, 2012.
9. John Paul Lederach, *The Little Book of Conflict Transformation*, (Intercourse, PA: Good Books 2003), pp. 208.
10. David P. Barach, and Charles P. Webel, *Peace and Conflict Studies*, (Los Angeles: Sage, 2009), p. 460.
11. Rachel MacNair, *The Psychology of Peace: An Introduction*, pp. 1-4.
12. Divine Principle interprets this to be an angel rather than a man.
13. Robert E. Lee, To Jefferson Davis, April 20<sup>th</sup>, 1865;

<http://www.civilwar.org/education/history/primarysources/robert-e-lee-to-jefferson.html>,

retrieved on September 29, 2012.

14. Bo Hi Pak, *Messiah—My Testimony to the Reverend Sun Myung Moon* Vol II; Part 5 of 5; <http://www.tparents.org/Library/Unification/Books/Messiah2/Messiah2-20e.htm>, retrieved on December 16, 2012.
15. Chester Crocker, *Taming Intractable Conflicts*, (Washington, D.C.: United States Peace Institute, 2009), p. 7.
16. *Malachi* 1:2-3.
17. *Genesis* 27:13.
18. *Genesis* 27:12-13.
19. *Genesis* 33:3-7.
20. *Governance and Social Development Resource Center*, “**Mediation in Intrastate Conflicts: The Contribution of Track-Two Mediation Activities to Prevent Violence in the Aceh Conflict,**” by **Barbara Kemper**, <http://www.gsdr.org/go/display&type=Document&id=3416>, retrieved on **November 10, 2012.**
21. *Genesis* 32:14-15.
22. *Genesis* 32:20.
23. *Genesis* 33:4.